

令和元年度 第1回東広島市総合教育会議 議事録

1 日 時 令和元年10月31日(木) 開会14時00分 閉会15時30分

2 会 場 東広島市役所本館3階303会議室

3 出席者 (構成員)

東広島市長 高垣 廣徳

東広島市教育委員会

教育長 津森 毅

委 員 渡部 和彦(教育長職務代理者)

委 員 織田 壽子

委 員 長嶋 香穂里

(その他の出席者)

副市長 松尾 祐介

健康福祉部長 梶永 里美

健康福祉部次長兼社会福祉課長 片岡 隆夫

社会福祉課自立支援係長 松井 章拓

こども未来部次長兼こども家庭課長 中村 保

保育課長 手島 一晃

学校教育部長 大垣 勇人

教育調整監 田中 宏憲

青少年育成課長 小島 弘之

(事務局関係)

総務部長 倉本 道正

総務部次長兼総務課長 大畠 隆

総務課課長補佐兼行政経営係長 中川 道浩

行政経営係 主任主事 永登 美穂

4 欠席者 東広島市教育委員会 委 員 坂越 正樹
委 員 京極 秀樹

5 議 事 不登校問題とひきこもりについて

6 内 容

○開 会

○高垣市長あいさつ

○議 事

不登校問題とひきこもりについて

<高垣市長>

それでは、早速でございますが、議事に入ります。

まず、協議に入る前に、議題につきまして、事務局から説明をお願いします。

<事務局>

それでは、議題につきまして、ご説明いたします。

本日は、「不登校問題とひきこもりについて」を議題としております。

不登校の問題につきましては、文部科学省の『児童生徒の問題行動・不登校等生徒指導上の諸課題に関する調査』によりますと、小中学校における不登校児童生徒数は全国的に増加傾向にあります。本市においても同様に、小中学校ともに増加傾向を示しており、憂慮すべき課題となっております。

また、昨今の社会問題のひとつとして、中高年のひきこもりの長期化・高齢化、いわゆる「8050問題」がございます。内閣府の「青少年に関する調査研究」によりますと、全国にはひきこもりの状態の方が110万人もいると推計されており、そのきっかけの一つとして、不登校も挙げられています。

本市においても、不登校をきっかけとして、ひきこもり状態となった方からの相談を受け、支援を実施している現状もございます。

本市の憂慮すべき課題の一つである「不登校」と「ひきこもり」に関し、市長と教育委員会とで現在の状況と今後の対応について意見を交換し、方向性を共有すべく、本日の議題とさせていただきました。

議題についての説明は、以上でございます。

<高垣市長>

ありがとうございました。

それでは、「不登校」の概要及び対応について、学校教育部長から説明をお願いします。

(学校教育部長説明【資料1】)

<高垣市長>

ありがとうございました。

続いて、「ひきこもり」の概要及び対応について、健康福祉部長から説明をお願いします。

(健康福祉部長説明【資料2】)

<高垣市長>

ありがとうございました。

ひきこもり問題については、全国で110万人くらいいると言われており、本市を20万人とすると、1,900人くらいの方が実はいらっしゃる。ところが、今の説明にありましたとおり、平成30年あるいは、令和元年において、相談が増えたとしても、年間30件くらいの相談しかありません。この問題は非常に潜在していて、なかなかSOSを発信しない。それは家族の問題もあるし本人の問題もあります。そうすると、一回ひきこもると、長期化して、長期化すればするほどなかなか通常の生活に戻るための支援が難しい状況があります。

また今年に入って、川崎の事件や元次官が長男を殺害せざるを得なくなるような事件があり、家族の中だけの問題だけではなく、社会としてかなりサポートしないと問題がなかなか解決しないのかと私自身思っていました。

先般、市長会議があり、ひきこもりの問題を議論しましたが、行政的支援が少ないという課題が共通認識としてありました。

また、昨日、NHKでひきこもりの特集を放送していましたが、ご覧になりましたか。これで、新しい知見を得ることができました。

ひきこもりには、発達障害というものが多分に影響していて、これは就学しているときには出ていないが、就職問題であるとか、様々な人生における色々なインパクトがあったときに、それを契機として発達障害としての診断を受けて、初めてわかるということがありました。

人間と人間との関わりの中で、義務教育の期間が、一番その該当者と社会がうまく接触する、または課題を発見しうる時期であると思います。

不登校とひきこもりは必ずしも全部が全部つながるわけではないようですが、相当にその時期における対策というのは重要なのかなと思っています。

そして、新しい取組として、教育委員会においてSSR、スペシャルサポートルームを実施し、効果も出てきているようです。

おそらく学校だけではなく地域とともに解決すべき問題だろうと思いますが、学校現場も大変忙しい状況にあり、働き方改革のなかで、業務の見直しを行って、先生方がそういう多様な子どもに対する支援ができるような形のものが需要だと思います。

そしてもうひとつ、幼児の段階からサポートできる仕組みとして、ネウボラがあり、子どもが生まれて就学までの間の発達状況のサポートできるような仕組みをやっています。

子どもの成長過程を見ていくなかで、早めの手を打つことが可能となり、かつそうすることによって、ひきこもりも減ってくるのではないかと、昨日のテレビを見ながら思いました。

本日は、不登校とひきこもりの2つのデータをお示しいたしました。それを踏まえて、委員の皆様の御意見を伺いたいと思います。

津森教育長からお願いいたします。

<津森教育長>

ひきこもりの支援のデータ紹介がありましたが、原因を見ると、市長がおっしゃったように、必ずしも不登校とひきこもりはイコールではない。ひきこもりの原因の大多数が不登校であるともいえませんが、義務教育段階で不登校状況になっているということは、有力な要因の一つであると言えるだろうと思います。義務教育段階で不登校対策をすることがひきこもりを減少につながっていくものであることは認識しているのではないかと思います。

不登校対策について、これまで不登校の子をどうやって学校に来させるか、という取組をしていたのは、学校の教員でありました。教員が早朝や夜間に訪問するなど、勤務時間外での取組の中で、何とか頑張って学校に来させようとしていました。

これは、今までの背景として、学校に来てくれさえすれば、勉強も人間関係もなんとか来る、来てくれなければどうにもならないという認識があったからです。それが強くあったので、学校に来た以上は、教室におきなさい、という形になりました。しかし、教室におるのがしんどい、けれども学校に来たら教室しかいるところがないという状況が何十年も前でした。それでもどうしても来ない子が増えてきたので、じゃあ、保健室に行きますか、という話になりました。しかし、不登校ではない体調不良の子も来るので、そういう子に会いたくないから保健室にも行きたくない、だから学校に来ない。いや学校には来い、ではどこにおりますか、となると、全然別室の何もない部屋に居させることとなっていました。とにかく、学校に来ることが大前提ということでやってきていました。

しかしながら、不登校が増える中で、それでは対応できない状況になりました。現状ではSSRという形で実施していますが、不登校でも学校には来られるが、教室には入れないということを学校として認めてあげる。そのための部屋を作り、掲示をし、家具を置き、居場所を作ってあげる。これがSSRです。

かつてはそのような発想がありませんでした。ここで、大きな転換があるかと思います。これが不登校の認識、現状であります。こういうことをやらないと不登校が減らないだろうと思いをもっています。

ひきこもりについて、発達障害に関する番組があったようでございまして、私は残念ながらちょっと見ていないのですが、いずれにしても、ひきこもっている方というのは自己肯定感が非常に低いのだろうと思います。

義務教育段階から自己肯定感が高まっていく状況が色々な条件の中で無かったのだろうと思います。不登校に限らず、子どもたちへの指導一般のなかで、自己肯定感の低い子に対して、どうしていくのかということで、早めに手を打っていく生徒指導がこれから大事なのかなと思っています。

<高垣市長>

ありがとうございます。長嶋委員、お願いいたします。

<長嶋委員>

市長がおっしゃったネウボラについて、就学前の子どもたちへの支援というところで、まずは幼少期の過ごし方が不登校やひきこもりへ大きく関連しているのではないかと考えています。例えば幼少期にたっぷりと遊んだ体験が多いほど、心と体のバランスが取れて、自己肯定感が醸成されます。そういった子どもは、途中で壁にぶつかったとしても、それを自分で乗り越えようという力がつき、強いところを持つことができると思います。そうすると、他者にも優しい気持ちにもなれるし、コミュニケーションをとることもできると思います。また、多様性を認め合う子どもとなって、不登校になった子たちをも受け入れられるようになると思います。そうすれば、不登校の児童生徒も学校に行きやすくなるのではないのでしょうか。

そのためには、家庭と幼稚園・保育園の連携や執行部と教育委員会の連携が大事になってくると思います。

また、子どもたちも大変な思いをしていますが、その不登校の児童生徒の保護者も心を痛め、悩み苦しんでおられると思います。まずは子どものありのままの状況を受け止め、そしてそれに寄り添うことが大切だとは思いますが、言葉でいうのは簡単ですが、すぐにそれを受け入れるのは大変だと思います。本市でも色々な取組があると思いますが、カウンセリングを受けたり、同じ悩みを持つ先輩保護者と話をすることで、不登校の子どもの接し方のヒントをもらって、ありのままの状況を受け入れる親としての覚悟ができると、その親の姿を見て、子も前へ進んでいけるのではないかなと思います。

親にその覚悟ができると、立ち直ろうとする子どもの姿をゆっくりと見守ることができるのではないかと思います。そのあたり、保護者の方へも厚く支援いただきたいと思います。

<高垣市長>

ありがとうございました。織田委員、お願いいたします。

<織田委員>

私が小学校の教師として担任をしているときに、不登校の子どもに出会ったのはたった一人でした。それも精神的な疾患で治療しており、今言われている不登校とは多少異なっていたのではないかと思います。

そのため、不登校の子どもが増加したことについて、いつも何故だろうと思っています。あえて言えば、親を含めた子どもを取り巻く環境の変化があるのではないかと思います。一方では、発達に課題があることに、親や関係者が逸早く気づき取り組むことが大切だと言われています。

保育所や幼稚園、認定こども園から小学校へのスムーズな連携が出来ていれば、入学後も適切な関わりが可能になると思います。一般的に小学校4年生までに、生きづらさを感じさ

せない取り組みが大事だと言われています。その頃からは、自分の特性に気付き、成長とともに乗り越える力が付くのではないかとされています。

今週、NHKテレビで連続して発達障害に係わる番組がありました。いろいろな立場の方のお話を聞くことで、理解を深めることが出来ました。広く学校の教員や関係者、保護者、地域の方々の理解を狙ったテレビ番組だったのかもしれませんが。

発達障害の母親の会が東広島市にもあります。日々、必死に子どもと向き合っている母親は、本当に疲弊しています。行政としてしっかり支えていかないと、ひきこもりの解決は難しいのではないかと思います。

昨日、下黒瀬小学校で教育研究会がありました。支援者によって、課題のある子どもたちへの個別指導がきちんとされておりました。大変よいかかわりをされていると思いました。

発達障害という言葉の歴史は浅く、しかも年々情報が新しくなり、教員の研修は必須となってきます。下黒瀬小学校は、黒瀬特別支援学校の先生を講師に研修をされています。他の学校も専門家を講師に招いて、発達障害の知識や関わり方を学んでほしいといつも思っています。

<高垣市長>

ありがとうございました。渡部委員、お願いいたします。

<渡部委員>

今日はひきこもりの問題で、子どもの小中学校のケースと大人の話と二つあると思います。要するにこの問題は、こころの問題だと思います。

以前、発達障害の小学生と中学生を集めて研究対象としていた大学院生がおりまして、彼は、発達障害の子どもの運動能力をいかに強化して、深めるかという研究をしており、私はそのアドバイスをしていました。

研究の一環で、鳥取の施設に子どもたちを集めて様々な取組をしていました。保護者の方にも来ていただいて、色々な協力もしていただいていたと思います。そのときに感じたのは、この院生は社会人留学で専門家でもあり現場でいろいろと指導されて、それを学術論文にしたいということで大学院に入ってこられた方です。その院生の態度を見ると、特別な接し方や話し方、指示の仕方がありました。特別な訓練、経験から生まれるものだと思いますが、やはり専門的な接し方が大事なのだと感じました。

今回の資料の中で本市の八本松中学校あるいは高屋中学校、他の所でもSSWの方々がおられて、一定の成果を上げておられます。

そういう方々は訓練や研修を受けている方が多いのではないかと推察します。

特別な子どもたちに関して最近では色々と研究が進んでいて、いままでは、一つの目標に向かって頑張ることが評価され、そこから外れる子はあまり評価されないこともありました。最近では、個々のそれぞれの能力をちゃんと評価する動きになっています。そのなかで、ある意味で特殊なそれぞれの個性に対する発達心理学的な理解について、児童であれば現場の先生方の、成人であれば地域の方々の理解が深まれば、ひとつの方向性ができるのではないかと

思います。

そういう意味では、本市のSSRの成果の内容を吟味して、どのような方法でどのようなよい結果が出たのか、あるいはまだ工夫の仕方があるのかといった具体の中から将来のあり方を考えることが大事なのではないかと思いました。

<高垣市長>

どうもありがとうございました。

津森教育長からは、不登校になる子どもには、自己肯定感が弱い子どもたちが多い傾向があるといいただきました。自己肯定をするためには、それまでの経験として自分自身の達成感、そういうものがあって初めて自己肯定ができるような気がしました。そのなかで、長嶋委員からは、幼児の時代の過ごし方の重要性、何か乗り越える力が遊びのなかでできてくるのではないかというお話でした。

織田委員からは、ご自身のご経験からして、発達の課題を小学校4年生までに見出してきちんとした指導ができれば、乗り越える力が付くのではないかとのお話をいただきました。一方で、発達障害を持つ親も非常に疲弊しているというご指摘をいただきました。まさに今年発生した事件などは、その象徴的な事例であると思います。発達障害、ひきこもり、不登校に対する理解不足、これは、渡部委員からご指摘いただきましたが、発達心理学的にみて、それはどうなのかという客観的な見方ができます。発達障害は必ずしもマイナスだけではないという事実もあります。本市では、昨年、東京大学が発達障害の子たちを集めて、東大ロケットというプロジェクトが展開されました。発達障害の子の中には、ある意味で異才の子、特別な才能の子がいます。野口英世がそうだった、またはモーツァルトも発達障害だったといわれるように、異常なる才能を持っている子もいるという現実問題としてあるわけです。その発達障害に対する理解を普及していく必要があるのではないかなと私自身思いました。

それから、渡部委員から、今の時代は多様性、ダイバーシティということで、個々に対する手当てが色々なところで行われています。教育の世界においても、個に応じた指導というのがこれからは非常に重要になってくるような気がいたしました。

そのなかで、本市が取り組んでいるSSR、スペシャルサポートルーム、その部屋についている先生方というのはキャリアや知見を持った先生方だと思いますが。

<津森教育長>

必ずしもそうではありませんが。

<高垣市長>

SSW、スクールソーシャルワーカーのような方が適切な指導をするなかで、不登校が解消されるのではないかと。後々、いろんな障害を乗り越えていく力を身に付け、将来的にはひきこもりも解消できるのではないかと、委員の皆様方の意見を聴いて思いました。

論点はどうでしょうか。ひきこもりの問題というのは非常に多岐に原因もあり、これをどういう風に解決していくかということ、福祉施策や地域課題ということも含めてやっていかない

といけません。その前段として、我々がサポートしていくことが可能な時期、ということで、幼少期から小学校4年生までの間でこんな施策をしてはどうかといったご意見や、あるいは小学校4年生以降で、こんな形のサポートをしてはどうかといったことを議論させていただけたらと思います。まずは、幼少期から小学校4年生までの間で重要なこと、我々がまだ出ていないことで、こんな風にしてはいいのではないかとといったことのご意見をいただければと思います。では、渡部委員から。

<渡部委員>

ひきこもりというのはある種仲間外れになって、ひとりで寂しく過ごすということかと思いますが、クラスの中で、自分たちの仲間、ということで勉強だけではなくて遊びなどで、ひとりぼっちにさせておかない、といった思いやり、そういう指導が大事なのではないかと思います。これは大人の世界も一緒だと思います。そういうきっかけを現場の先生方が気配りをするのが大事なのだと思います。先ほど市長がおっしゃったように、こういう方の中には特別な才能がある方もいて、思い浮かぶのは山下清のような方です。これからの時代は、画一的なものではなくて、新しい何か、イノベーションが生み出せるような特別な才能のある人が必要です。ですから、100人の優秀な人よりも、一人の非常に変わったアイデアを出せるひと、それが100人、1,000人にぱっと広まっていくというのが、これからの日本の教育のなかで大事なことになるのだと思います。そういう意味では、発達障害の方全員が素晴らしいイノベーションにつながるとは必ずしも言えないかもしれませんが、大事なことはそのような芽をみんなで保っていくという、そういうための心の教育、そういう特別な子どもに対しての接し方、そういうことも大事なかなと思います。

<高垣市長>

ありがとうございます。織田委員、お願いいたします。

<織田委員>

私の教師時代を振り返ってみると、発達障害のある子どもはいたのだろうと思います。ただ、その子を周りの子どもたちが一緒になって支えていたように思います。子どもたちは、上から目線ではなく、家に帰っても一緒に宿題をしたり遊びに誘ったりしていたのです。

今思うと、あの子は発達障害があったのかなあと思われる子どもが、教室の中でそんなに気にならなかったのは、周りの子どもたちや親たちが温かく接してくれていたからなのだと、そんな気がしています。渡部委員がおっしゃったように心を育てていくことはとても大事です。ただなかなか成果が出てこないのです。

個に応じた指導について、市長がおっしゃいましたが、福山のある小学校がイエナプランを導入した教育を来年度から実施すると聞いております。いろいろなところから入学の問い合わせがあるとのこと。一斉授業の見直しが必要になってきているのではないかと思います。イエナプランについて詳しくは知りませんが、私も関心を持っております。発達に課題のある子どもを含めて個に応じた学習は、これからは必要なのではないかと考えています。

市内には、発達障害のある子どもを受け入れる放課後デイサービスがありますが、新しく開設されてもすぐ定員一杯になるという話を聞いております。放課後、一人ひとりの子どもの特性を知り、個に応じた関わりをしてくれる施設が、今からは求められていくのではないかと思います。

学校の教員も、働き方改革が行われれば、土日を活用して主体的に研修をすることが大事だと思います。教員の前向きな研修によって不登校やひきこもりも少しずつ減少していくのではないかと思います。

<高垣市長>

ありがとうございました。長嶋委員、お願いいたします。

<長嶋委員>

先ほど市長がおっしゃった東大ロケットのお話は広島でもあったのでしょうか。

<津森教育長>

今やっています。

<長嶋委員>

東広島でもやってみてはどうかと思ひまして。

<高垣市長>

去年やったんですよ。

<長嶋委員>

勉強不足で失礼しました。発達障害の子どもたちだけでなく、さまざまな子どもたちが交流して、一緒に学ぶという形もいいのかなと思います。そうすることでお互いを理解することもできると思います。遊びを通して一緒に学べるのも必要なかと思ひました。例えば、子ども向けの遊びながら学べるワークショップや生涯学習フェスティバルなどで、保護者や地域の方が学んだりすることができたらいいなと思ひました。

<高垣市長>

ありがとうございました。教育長、お願いいたします。

<津森教育長>

いろいろとご意見ありがとうございました。改めて不登校に焦点を当ててお話をさせていただきますが、不登校の子どもたちに対して教室にいなければいけないよ、というところからスタートしました。それは、別室指導も最初はしなかったのですが、するようになりました。そして今はSSRという非常に子どもたちにとって居心地のいい場所となりました。それをなぜ

いままでしてこなかったかという、やはり学校の教員からすると、一つの決まったルールから逸脱することを認めると雪崩打つのではないかという怖さがあります。だからそういうものを認めづらかった。しかし、やってみるとそういうのもありだなという感じに今なってきていると思います。先日、委員の皆様には高屋中学校を見てもらいましたが、とても居心地のいい部屋となっています。これまでは別室指導といっても何もない教室に机だけがあって、そこにおりんさいという感じでした。しかし、SSRはそこにいることで生活もできる。自分のクラスが何時間目に何をしているかの情報も書いてある。なので、行こうと思えばそのときには行ける。そんな形のものになっていて、これは学校教育における一つの発想の大きな変換だと私は思っています。そういう風に考えてみると、小中学校においては、ずっと昔から同じやり方をしているところがかかなりあるわけです。それが、多様性を認めていくような形のものに少しずつ変わらなければならない部分があることは確かです。それは、先ほどありました授業の仕方、あるいは学習集団の組み方もその一つのことだと思います。その中に個に応じた指導といったこともあるし、そうした多様性を大事にする中で、いろんな個性の中でいろんな創造性が育ってくる。そういう姿がすこし見えるような気がするんですね。

不登校の問題は、学校の中では目の前にある課題でありますから、幼少期からもちろん大事ではあるのですが、目の前にいる不登校の子をどうしようかという取組がまずは第一なので、このSSRが一つの転換だと思いますから、このやり方をひとつのターニングポイントにして学校教育の在り方を見直すところは見直していく必要があるかなあとご意見を伺っていて思いました。

<高垣市長>

渡部委員からは、ひとりぼっちにしないような指導、そして先生の気配りが大変重要であるとのお話をいただきました。

織田委員からは、昔は発達障害の子がいたけどみんなが支えていた、それを聞いて私も思いました。私の小学校は1クラスで、小学校1年生から6年生までずっと一緒でしたが、やっぱり発達障害の子がいました。でも、一人が疎外されることなく、ずっとみんなで一緒に過ごしていました。ということは、ミニ社会ですから、子どもたちが、いろんな人がいるんだということを認識することが重要なことだと思います。

長嶋委員からも、発達障害の子と一緒に遊んだり、学んだりする環境づくりが非常に重要で、生涯学習フェスティバルなど様々な形で、親にも地域の人にも学んでもらうことが必要だと思います。

津森教育長は、学校として、みんなが集まってそこで義務教育を行っていくということが、ずっと教育の主流で、多様性を認めるというのは、学校として秩序を守り、うまく教育ができないのではないかという不安があったけれども、高屋中学校でのSSRを見ると個に応じた教育ができることがわかりました。

イエナプランのご紹介もいただきました。皆様方も注目していると思います。イエナプランは、一緒に教えたり教えられたりする関係のなかで、ひとりぼっちにさせないような環境づくりにも役立つのだと思います。

一方で、いよいよ最近は、私も実験しましたが、5Gといった新しいテクノロジーにより個に応じた形の教育ができる可能性が出来つつあります。そういうことを踏まえながら考えていく必要があると思いますが、今日おいでになっていない坂越先生と京極先生からご意見を承っていますので、ご紹介したいと思います。

<事務局>

それでは、事務局からお二方のご意見を紹介させていただきます。

まずは坂越委員からのご意見でございます。

本市において児童生徒の割合が増加しており、今後に対応を充実させるべき取組とともに、不登校に対する考え方や対応の仕方を転換する必要があると思います。割合を低減することが目標となつては、問題の内実を見失う恐れがあります。第一に考えるべきなのは、児童生徒の最善の利益であり、彼らの学びや生活をどう支援できるか、ではないでしょうか。

教育機会確保法をめざすところとして、「不登校であるというだけで問題行動と受け取られないよう配慮し、児童生徒の最善の利益を最優先に支援を行うことが重要」とあります。学校ではないけれども集まって学べるフリースクールの活用や、ICTの活用により家庭での学びも現在では可能となっています。

「楽しい学校」、そして「学校を楽しいと思う子ども」であってほしいと願いますが、一方で、どうしても学校文化になじめない子どもがいることは事実です。大学に勤務していると、案外通常のコース外から入学してくる学生がおり、様々な学びを経て人生を切り開いていく可能性が出てきています。不登校を認めた上での学びへの支援もあってよいかと思います。

最後に、自己の意思に反して学校へ行けない児童生徒を学校へ行けるように支援することは当然やらなければならない取組です。そのためにも、彼らと向き合い、思いを聴き取ることが、重要だと思います。彼らを社会から孤立させないこと、それが将来の「8050問題」を深刻化させない方策であると考えます。

以上が坂越委員からのご意見でした。

続いて、京極委員からのご意見です。

専門家による不登校対策や中高年のひきこもり対策はきめ細かく行われていますが、いずれも増加傾向にあります。これは、個々に要因が異なることに起因するためではないかと思います。

このため、学校においては、先んじて個々の子どもたちの能力をいかに伸ばしていくか、また個性を伸ばしていかに自信を持たせるか、そのためにはどうすべきかを考えることが最も重要だと思います。

広島県教育委員会が取り組む「学びの変革」を行い、避けては通れない不登校対策として、現在実施されている八本松中学校や高屋中学校のようにSSRの設置により、個別対応していくことは一人でもひきこもりを少なくする対策の一つとなるのではないのでしょうか。事実、SSRの設置により不登校の生徒が減少している事例があることから、個々の生徒にきめ細やかな対応ができる機会の提供は一つの解決策のように思います。

また、ひきこもりは学校だけで解決できる課題ではないため、地域と学校が一体となって子

どもたちを育てる仕組みを構築していくことも必要だと思います。

地域により事情は異なるため、いくつかの事例を参考としながら、具体策を練っていくことが重要だと思います。

京極委員からは以上でございます。

<高垣市長>

以上のご意見をいただいております。

そのなかで、少し大切だなと思ったのが、やはり子どもを育てていくなかで、学校にすべてを依存するというだけでなく、地域と一緒に子育てをしていくことが非常に重要なのだと思います。子どもが達成感を得るのは、例えば、地域のお祭りの中で、ひとつの役割を演じて、それを成し遂げた時に大人からも評価され、子どもたちがそこに自己肯定感が生まれてくるような気がします。実は、地域のお祭りをどうするか、というのは後継者不足の話もあり、結構大きな問題でもあります。そのなかにいろんな形で参画する中、やはり社会、地域が子どもを育てていくという関係にもなるのだと思います。

教育長、どうなのでしょう。地域との関わりについて、東広島は結構やっていると思います。一校一和文化もあり、そのあたりの関係性、あるいは今後こうしたらいいなということがあれば、お願いいたします。

<津森教育長>

確かに、東広島の地域では、いろいろなところで、学校も大いに協力しながら、いろいろな活動をしています。そこに子どもたちができるだけ参加してくれるようにということで、先生たちも考えているわけですが、そこで得られるものは非常に大きいものがあると思います。日常の学校のなかの教室だけでは体験できない、あるいは学校の敷地のなかだけでは体験できないことができるわけで、非常に意義があると思います。

今ちょうど、国の方もコミュニティスクールと並んで、地域で学校を支えていこうという、地域学校協働活動を奨励しているといいますか、進めようとしています。これは、一つ大きいのは、地域ごとにコーディネーター役を一人置いて、その人がいろんな地域活動をコーディネートしていく。学校がもし余分な仕事として受け持っているものがあれば、それを受けてあげようと、学校の負担も減るでしょう、というような地域学校協働活動というものがあります。これをぜひ東広島市でも進めたいと思っているところでございます。ぜひともひとつまた委員の皆様にご支援いただきたいと思います。

<高垣市長>

国の方でも、地域の関わりというものに非常に注目をしているのでしょうか。

<津森教育長>

国の方でも、補助事業としてやるのですが、国全体で同じ課題があり、進めようとしています。自治体によって先行してやっている自治体もありますが、本市は、そういう意味では、た

くさんの地域の活動はあるんだけど、それがそういう形でシステム化されてなかった。それぞれいろんな形でいろんな方々が関わっていて、窓口は全部学校の先生がしていたという実情があります。活動はあるわけですから、それをコーディネートする役をもつ人材がいてくれたら、非常にこれは大きな意義があるかなと思います。

<高垣市長>

そのコーディネーターは先生がするのでしょうか。

<津森教育長>

いえ、地域の方で。その方がいることが国の補助の前提でもあります。

<高垣市長>

地域との関係で、何かご意見ありますか。はい、渡部委員。

<渡部委員>

教育長がおっしゃったように、各地域でいろいろな行事があり、子どもたちに参加してもらおうと工夫があるのですが、組織としては住民自治協議会が発足して、そのなかでもいろんな役割分担もあります。しかし、学校教育との関係でそれに特化してやっていこうというのは、あまり見えてきていません。そういうところで、この前、ある研修会で鳥取県のある町の教育長がお話になったのですが、学校と地域とが、いかにコミュニケーションをとって子どもたちを育成しているかという事例報告がありました。それから、岩国市の教育長も非常に積極的に学校と地域を結びつけようとあの手この手で、お祭りの機会などでやっています。本市もそういう動きがあるわけですが、どこかそういう上手にやっている地域をアピールしていただいて、そしてこういうような取組は素晴らしいよ、というようなやり方なんかも伝えるのも大事なのではないかと思います。成功事例ですよ。

和文化は小学校中学校でも各地でやっていますので、地域に行けば素晴らしいなと思います。その成果を全市に伝わるような機会などを工夫すると、うまくいくのではないかという感想を持っています。

<高垣市長>

その成功事例として、西条小学校の「白壁の街」ですよ、39代の歴史を踏んできて、6年生全員がひとつのオペラを演じて、みんな達成感を持っているような感じで、終わったときの顔を見たら満足感に溢れている子どもたちばかりでした。そうすると、西条小学校はそういう成功体験をもった子どもたちで、あんまり不登校であるとかひきこもりとかは少ないのでしょうか。

<津森教育長>

少ないことを願うんですけども、必ずしも絶対にならないかというところなんです。本当に

私も小学生のときを知っていて、こんなに生き生きとやっていたのに、あるいはこんなに頑張っていたのに、なぜこの子が不登校に、というケースもあるんです。これは少なくないと思います。これが不登校の難しいところで、例えばとっても頑張っている子でも、過度な期待が家庭の中でかかりすぎるがゆえに、プレッシャーがかかってという形で表現をするケースも結構あります。そこは、難しいところで、一人一人によって違うところであります。そうはいつても、市長がおっしゃる成功体験はいろんな意味で成長の大きな基盤となることは間違いないので、これについては非常に大事にしていきたいと考えています。

<高垣市長>

今日は貴重なご意見をたくさんいただきまして、ありがとうございました。

今日のお話を聞いて、これからシステムをどういう形でこの問題解決の施策を打つか考えてみますと、まず、乳幼児の時期の重要さがあって、ネウボラでは一つ、必ずしも幼稚園や保育園に行っていないそういう家庭保育に対するちゃんとした啓発というんでしょうか教育というんでしょうか、お母さん方に知識を持っていただくことも、いずれやらないといけないのですが、まだ出来ていないと思うんです。そのなかで、子どもの発達ということを、それぞれ個性がある、それを認めてあげる。同じ年の子がこうだから、うちの子はどうも、というのではなくて、それは我が子の個性だと認識していただけるよう、そういう取組もやっぱり必要なのだろうという気がします。

また、ひきこもり問題、不登校問題は社会問題で、その原因は色々あり、ひとつ発達障害という要素もあって、それはある意味、これは個性なんですよ。これは決してマイナスではない。この間びっくりしたのは、国連の環境サミットがあって、スウェーデンの16歳の女の子が、地球がこれから持続可能な地球であるためには、環境問題というのはあなたたちの責任ではないですかと、オバマさんに言いましたよね。あの子も発達障害なんですよ。アスペルガーで、ものすごく徹底してその分野には入り込んでいって、誰にも負けないような見識を持つような性格。そういう特異な才能なんだけど、ある意味からいうと別な面で発達の障害がある。そういう子が世の中を変えていく可能性がある。やっぱり発達障害に対する考え方をすこし直していく、隠さないといけないんだ、ではなく、そういうのも個性だと、それを認めて、それが多様な社会なんだという認識をしてもらうのも必要なのだと思います。

そして、SSRは、かなり効果が出ていて、京極委員のご意見にもあったように、少し分析しながら、その効果を研究しながら、展開していく必要があります。

それから、社会との関係を、住民自治協との関わりというものをもう少し、地域で子どもを育てていくためには、その意味からすると傍観するのではなく、少し入っていく。一緒に子育てをする関係づくりというものを住民自治協の方ともお話ししたいと思います。

もうひとつ重要なのが、先生方の働き方改革です。織田委員が言われたように、土日に少し時間を取れるような、そういう改革をするなかで、色々な新しい知識を身に付けていただいて、先生が核となって、そういう指導をしていく、というような環境づくりが重要なのではないかと思います。

委員の皆様から何かコメントがあれば。

<渡部委員>

教員の働き方改革が大変大きな問題であります。先ほどのSSRという取組の中で、かなり専門的な知識や経験があれば、SSRのところに地域の方もサポートできるのではないだろうか、そうすれば教員の負担も減るのではないかと思います。そういうところまでいかないまでも、SSRの環境づくり、教室のお膳立てといった支援、そういうところからも始めて、関わりをもっていくのも一つの方法かなと感じています。

<織田委員>

余談ですが、私は篤志面接員というつながりで広島少年院へ行っております。先日、ある教務官と話しをする中で、少年院には、発達障害のある子どもが結構いるということです。その多くは、周囲の理解が無く、生き辛さから不登校になり、非行に及んだのではないかと話をしました。

教務官が「少年院に来る子どもも、親や周囲の者が愛情をもって接していけば、必ず立ち直ることができます。」とお話されました。親だけでなく関わる大人がもっと愛情をもって接すれば、不登校の子どもの減少にもつながるのではないかと思います。

<高垣市長>

やっぱり戦後の荒廃においては、最近のドラマ見ますけど、社会が浮浪児を育てていく、愛情をもって育てていく。「なつぞら」もそうでしたよね。ああいう社会が戦後にあった。今はそういうのがない。そこにはひとつ人間に対する愛情みたいなものがあったように思います。

はい、長嶋委員。

<長嶋委員>

渡部委員がおっしゃった、自治協と小学校との連携のお話しのなかで、私たち大人がしっかりと子どもの特性を認識する必要があると思います。しっかりと私たちも勉強をしないといけないと思いました。大人が変わらないと子どもも変わらないと思いますので、そのあたりは、勉強できる場を提供していただきたいと思います。

<高垣市長>

生涯教育のなかでも、やはりそういうことを題材としていく必要があります。担い手として教員の働き方改革の中で、そういう一連も積み重ねていただいて、地域に出て話を伺うということも必要かもしれません。

教育長はいかがでしょう。

<津森教育長>

ありません。

<高垣市長>

今日は本当にありがとうございました。次の課題が出たようですが、「働き方改革と地域社会」ということで、12月にはまた皆様方にご意見をいただければと思います。

今日いただいたご意見は来年の施策、あるいは来年にはすぐにはならないかもしれませんが、何らかの形で施策に反映させていただきたいと思います。

今日はありがとうございました。

時間となりましたので、本日は終了させていただきます。

次回の総合教育会議は、12月24日の14時からを予定しておりますので、どうぞよろしくお願いいたします。

本日はこれにて閉会いたします。

ありがとうございました。